

「七日市場の歴史(第三十一回)」

昭和中期の七日市場③

曾根原 孝和

春秋に道路補修を 昭和二十年代頃は、道路の補修は村の財政では十分にできず、春と秋年二回、区民の勤労奉仕で道普請という名称で補修をしています。道路の状況の見立をし、普請日には補修の土砂を運び、万能やじょれんで修理をしたのです。二十五年には、手当は一戸当たり一円、出不足金は五十円で実施しています。

藤ノ木学校道改修 二十八年には、藤ノ木の道路を改修しています。この道は、耕地内の通学道路で、しかも生活道路としても大事な道で、重点的に改修する必要があったのです。道幅は約一・五メートルで、荷車や運送車が通れる程度で、輪道以外には雑草が生い茂っていました。

雑木林を通る道 この道は、昭和二年の地図によると、藤ノ木から北進し、下長尾の東北端で飛驒道(橋場道)につながっています。しかも、四郎兵衛堰(藤ノ木堰)と藤左衛門堰との間は、ナラやクヌギなどの雑木林で「太田屋林」と呼ばれ、学校道はその中を通っています。

その頃小学生だった方の記録には「春から秋にかけて青葉の茂る頃は昼間も薄暗く、登校時は急いで通った」「ただ、下校時はこの林は最高の遊び場で、遊んで帰ったことが多かった」とあり、「正月の三九郎の時は、この林からクヌギの木を伐ってきて作った」とも記しています。

区の道路費で 二十八年頃には、太田屋林の学校道の東は水田化されていますが、西には林が残っていました。学校道を舗装する費用は、村からの助成金が少ないので、区の道路費二千五百円を支出しています。なお、この道は約三十年後に四段の完全舗装になりました。



昭和2年地図(堰名等挿入)

「七日市場の歴史(第三十二回)」

昭和中期の七日市場④

曾根原 孝和

上水道の敷設事業 昭和二十九年、三郷村になつての大きな事業の一つに上水道の敷設があります。

三十年十一月二十八日、区の評議員会では、事業の現況の報告を受け、経費の一部短期借り入れ募集に協力することになりました。さらに、十二月二十三日の評議員会では、工事の細部が決められました。

○水道敷設の七日市場労力計画は、二、六七三円で一戸約二三円

○作業に出動出来ない人は、一円穴掘り六八円、埋戻し五八円で精算

○家庭への引き込み工事は組内で相談して決める など

苦勞した穴掘り 工事は、冬期間を利用して行われました。各戸では定められた場所の石灰が引かれた区間を、つるはし・シャベル等で穴を掘りました。冬、堅い道を掘るのは大変でした。なかでも、諏訪神社西側の道は、杉や松の大きな根がありとても苦勞したようです。穴掘りが終わると同時に業者が水道管を敷設し、埋め戻して工事は終了です。

このようにして、三十年から三十一年にかけて上水道が完成し、どこのお家庭でも蛇口をひねるときれいな水が出るようになりました。水を見た人々の歓喜の声をあげる顔が浮かびます。

歴史を語る漉し井戸跡 上水道ができるまでは、人々は漉し井戸からバケツで水汲みをして台所に運んでいました。漉し井戸は、家の近くを流れる川（セング）の端に沿って土管を埋めて、ここに浸透してくる水を砂利や木炭によってろ過してきれいにするものです。

昨年、「七日市場の歴史を学ぶ会」では区内の漉し井戸調査をし、設置されていた八八か所を確認して地図上に記しました。

なお、漉し井戸の姿は、今も布山弘さん（写真）と布山幹夫さん、等々力克夫さん方に見られます。



「七日市場の歴史」(第三十三回)

曾根原 孝和

《特集》 堰下の馬頭観音

馬頭観音の整備

昨年十二月、七日市場水環境保全組合は、堰下の馬頭観音群を、七日市場区、「七日市場の歴史を学ぶ会」等の理解と協力を得て、環境保全と文化財保存のために整備しました。

この馬頭観音群は、平成十八年刊行の『三郷村誌 村落誌編』の編纂時に発見されました。区有地墓地の端と及木堰水路敷の草むらにあり、土に埋まっているものも多く、群として記録されました。

特色多い観音 その後、「七日市場の歴史を学ぶ会」では、区内の石仏などの調査・研究を進め、堰下の馬頭観音についても、きちんと調査をして冊子等にまとめてきました。

結果は全体二六基中、彫像碑は一一基、文字碑は一五基。一番古いものは文化十五年(一八〇八)の彫像碑で、文字碑は文政元年(一八一八)のくずし字で馬頭観音世音と書かれたものです。一番大きなものは高さ八〇センチの文字碑で、多くは四〇から六〇センチです。特色として、天保九年(一八三八)の坐像があり、蓮華台上に坐り三郷には他に見られないものです。また、文字碑に「馬頭尊」があり、尊と記されたものは三郷に二基しかない貴重な碑です。他には、二頭の馬を祀ったものが二基あるのも特色です。なお、建立者氏名がわかるものが七基あります。

堰下への移動 堰下の馬頭観音は、昭和四十年代頃までは、現在地から北西へ約一〇〇メートルの及木堰近くにありました。幕末ころまで近くに馬捨場があり、その近くに馬への感謝と霊を祀るために建立されてきたものと推測されます。明治になり馬捨場は耕地になり、馬頭観音も忘れかけてきました。その後、馬頭観音は道路拡幅等のときに堰下の現在地に移動され、慰霊と保存が図られてきたものと思われれます。



特集 七日市場の馬頭観音

曾根原 孝和

三郷の約一五割 三郷郷土研究会の石仏グループの馬頭観音調査では、現在、三郷全体では二六一基です。その内、七日市場は三九基で、楡五四基、中萱四〇基について多く、三郷全体の約一五割を占めます。

種別と時代別 種別では、彫像碑が一六基（立像一五基、坐像一基）、文字碑が二三基です。

時代別で見ますと、江戸一二基、明治八基、大正三基、昭和一基で、時代不明が一五基になります。江戸時代の中では、天保（一八三〇～一八四三）が五基と多く、次いで安政（一八五四～一八五九）の三基です。

地域建立 大きい碑は、西木戸観音原にある文字碑で、高さ120^{センチ}幅80^{センチ}です。文化二年（一八〇五）建立で、明治四十二年に再建され、銘文に七日市場とあります。次は、中村観音原の高さ108^{センチ}の文字碑です。天保十三年（一八四二）建立で、銘文はありません。三番目は藤ノ木の文字碑92^{センチ}で、弘化四年（一八四七）建立です。銘文に藤木中とあります。この三つの文字碑は、銘文や大きさ、建立場所などから地域の人々が協力して建立し、みんなでお参りをしてきたと思われまます。

個人建立 その他の馬頭観音は、大きさも四〇～六〇^{センチ}位が多く、個人で建立して愛馬に感謝し霊を祀ってきたと考えられます。堰下の群集の他は、家の前や屋敷内、土手などにあり、個人名のあるものが十二基あることからもうかがえます。

多い理由 七日市場に馬頭観音が多いことは、江戸時代は薪や刈敷などを、小倉北山や南黒沢山等遠方から取ったことや、中馬稼（運送業）なども関係すると考えられ、今後深めたいと思います。



「七日市場の歴史(第三十五回)」

昭和中期の七日市場⑤

曾根原 孝和

西木戸の道祖神祭り 「七日市場の歴史」六で、七日市場には四基の道祖神があることを記しました。みな江戸時代後期の建立で、外からの悪霊を防ぎ、縁結び・子宝・五穀豊穰・旅の安全を守る神様として村人に親しまれ信仰されてきました。

西木戸では、昭和四十年(一九六五)頃まで道祖神祭りが行われていたといわれます。昭和十五年(一九四〇)頃は、小学校一年生から六年生までが、子供仲間といって一月の御柱・三九郎に参加しました。

御柱 御柱は一月七日、道祖神前の広場に立て、二十日に倒しました。蚕影神社の社殿で大人が御幣や縄綱などを作り、子供はお祝いの俵を大人の指導で作りました。御柱を立てる時は、子供たちが区内を「御柱立てるで寄っとくれ、出なけりや出不足〇〇円だ」といって触れ回りました。お祝いの俵は、子供たちが新婚の家や初子誕生の家へ「おめでとうございます」と言って投げ入れ、ご祝儀をもらいました。その後、子供たちは年長の家に集まり、ご祝儀を分け雑煮をご馳走になりました。

三九郎 三九郎は、一月十四日に近くの田圃で行われました。子供たちは門松納めの日から各家を回り、門松やしめ縄飾り・だるまなどを集めました。そして柳の木やわらなどといっしょにして小屋を作って遊び、三九郎の当日には、夕方区内を大声で三九郎を触れ回りました。火は年長者がつけ、子供たちは、歌を歌って回りました。そして後で柳の枝につけた繭玉だんごを、焼いて食べるのが楽しみでした。

行事の終わり 道祖神広場にある蚕影神社では、昭和四十年頃まで講仲間により祭りが行われました。その後この祭りも、御柱・三九郎と共に姿を消しました。農家の兼業化や転入者の増加、子供たちの遊びの変化、さらには道祖神前の道路の拡幅などが影響したと思われる。



35cm程のお祝いの俵

「七日市場の歴史(第三十六回)」

昭和後期の七日市場

曾根原 孝和

圃場整備の取り組み 七日市場の昭和後期の大きな出来事の一つに、圃場整備ほじょうがあります。上の写真は平成十七年のものです。広い田んぼが並び、道路や水路も真っすぐなものが多く目につき、整然としています。これは、平成十一年（一九九九）、南部地区県営圃場整備事業が完成してからです。

以前の多様な形の田 下の写真は、昭和二十三年（一九四八）の七日市場です。田の形は横長が多いですが、大小様々で曲がって並んでいます。また、庄野堰も緩やかに曲がりくねっており、枝堰から取水する田の数が多いことも分かりま

す。
五十五年から推進 水田一枚の面積を三〇㍑（約三反歩）にする三郷村の圃場整備事業は、昭和五十二年（一九七七）から始められましたが、七日市場は四十八年の調査で同意率が低く、五十年推進委員会を解散しました。それが五十五年に、南部地区県営圃場整備事業として推進されることになり整備されました。



「七日市場の歴史」(第三十七回)

昭和後期の七日市場②

曾根原 孝和

圃場整備の範囲 七日市場が入る南部地区県営圃場整備事業は、役場前の村道より南の地域で、他に野沢・下長尾と一日市場・上長尾の大部分、二木の一部を含む約三五〇町歩でした。事業着工は昭和五十九年で、竣工は平成十一年でした。

推進委員会を結成 区では五十五年、この大きな事業の推進に、一二の隣組より各一人の他、村会議員・農業委員・農協惣代・土地改良区委員(堰惣代)・農家実行組合長代表・区長の計二二人で推進委員会(会長三澤寅隆)を結成しました。

その後、役場の担当者から説明を受け、参加する水田の地番等を調査し、約九十割の参加率でした。翌年には、推進委員会を圃場整備事業委員会に組織替えして推進しました。

区民の深い理解 ただ実行には、先祖から受け継ぎ親しんできた土地の交換分合、費用も受益者は一七・五割を負担することなど、大変な難しさもありました。そこで、受益者と事業委員会が何回も話し合いを重ねて推進し、水田は整然とした区画になり、大型農機による作業ができるようになりました。

総合整備計画も なお、五十五年からは三郷村農村総合整備計画が策定され、基幹となる事業が推進されました。七日市場では、各隣組で意見集約をして要望をまとめ、五十六年に次の事業が指定され翌年着工しました。・横沢堰・及木堰の集落内を三面コンクリート張りに ・宮下商店から北へ三峰様前までの道路を四ヶ幅に ・千国道(竹内宅から観音原)を五ヶ幅に

豊かな環境を 二つの事業で地域の環境は整備され、省力化の農業生産も進みましたが、風情ある田園の景観は失われました。今後は、現存する景観を守りながら、農業や生活の進展を考えていきたいものです。



整備された及木堰

「七日市場の歴史(第三十八回)」

昭和後期の七日市場③

曾根原 孝和

焼却場建設の動き 昭和後期の七日市場においての大きな動きに、ごみ焼却場の建設問題がありました。

昭和四十九年(一九七四)十一月、七日市場の南方梓川河川敷の氷室地区(現老人福祉施設「サルビア」周辺)に、一市一町六か村(松本市・波田町・山形村・梓川村・安曇村・奈川村・堀金村・三郷村)の西部環境衛生施設組合が、ごみ焼却場を建設するとの動きが浮上してきたのです。

このことは、数年前から広域行政で設置することが決まり、設置場所については梓川村の花見・下立田・岩岡等予定地がありました。しかし、いずれも地区又は周辺住民に反対され、転々とした結果、氷室地区が有力候補地として浮上してきたのです。

耕地集会で反対決議 今までは他人ごととしていた七日市場区民も、隣地に設置が浮上したことから、この問題に真剣に取り組みざるを得なくなりました。そして、このことの可否について区民の総意をもって判断することになり、五十年五月十七日に村役場との話し合いと耕地集会を併せて開きました。

村からは助役・村議会議長・保健衛生課長が出席し、「ごみ焼却場を氷室地区に設置する予定で事業計画が進んでいるので賛成してほしい」「規模は予算額一五億円、毎日三〇トンを二基で焼却、二四時間焼き続け公害にならない」「皆さん全員が不賛成なら設置出来ないと思うが、公共的見地から必要性を理解して賛成いただきたい」との趣旨が述べられました。

しかし、総会出席区民は、そろって反対を唱え、「七日市場区民を挙げて反対しなければならぬ」と決議し、至急、対策委員会を結成することを決定しました。



「サルビア」と周辺地

「七日市場の歴史（第三十九回）」

昭和後期の七日市場④

曾根原 孝和

（ごみ焼却場問題つづき）

対策委員会の結成 耕地集会の決議にそつての対策委員会は、各隣組（当時は一七組）一人の委員と村議会議員・農業委員・衛生委員・農協惣代・消防団長・青年団長・婦人会正副会長・老人クラブ会長・耕地総代など四〇人で構成されました。

反対運動の経過 第一回の委員会は五月二十八日に開かれて、各隣組の意見集約が行われ、全隣組が反対であることを再確認しました。そして、反対運動を地区あげて進めることにしました。その後の主な動きを記します。

○九月十八日、委員会と西環組合と話し合うが、意見は並行で解散。その後もたびたび話し合うが両者の意見は並行。この頃、氷室・真々部にも反対期成同盟会ができる。

○五十一年四月、建設に反対する七日市場・真々部、氷室の一部反対者で三地区共闘会議を結成。

○七月十二日、共闘会議は約二〇〇人を動員し、組合の常設委員会会場前（梓川役場前）で抗議集会を開き座り込む。

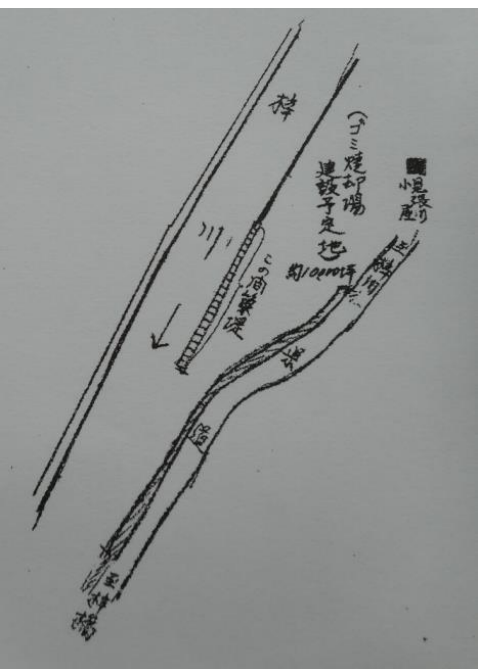
○七月十四日、西環組合会議議長に建設白紙撤回の要望書を提出。

○九月二十五日、築堤問題について、西環組合・千曲川工事事務所・共闘会議の話し合い。

（焼却場建設には、予定地の北東側に築堤が必要になる（※左の地図参照）。河川敷の築堤のために所管の建設省千曲川工事事務所が話し合いに参加）

見張り小屋を

○十一月二十一日、共闘会議は、建設予定地の隣の水田に「見張り小屋」を建てる。以後、三地区より毎日数人が交代で詰める。



太田藤一郎「ごみ焼却場予定地及び築堤略図」による

「七日市場の歴史(第四十回)」

昭和後期の七日市場⑤

曾根原 孝和

(ごみ焼却場の問題つづき)

反対運動活発に 十二月十二日、三地区の共闘会議は、建設予定地堤防上で反対集会を開きました。この時は、反対者は堤防上で「生命を売るな」「絶対阻止」などのプラカードを掲げてデモ行進をしました。

年を越した五十二年一月二十八日、建設省千曲川工事事務所は、建設予定地の築堤工事を始めようとなりました。しかし、三地区共闘会議の実力阻止にあい、工事は延期されました。

調停団が仲介に このような両者の対立をみて、時の耳塚・北沢両県会議員と上條豊科町長が混乱を打開しようと調停に入りました。調停の内容は「西部ごみ焼却場の建設と切り離して、築堤工事を進める」ということで、四月二日、西部環境組合と三地区共闘会議の間で協定書が取り交わされました。

堤は完成したが 調停により建設省千曲川工事事務所は、四月三十日築堤工事を始め、九月末で完成させました。調停団の仲介により西部環境組合と三地区の共闘会議の話し合いは再開されました。しかし、以後、五十五年七月三日まで、六回話し合いが行われましたが、両者の見解は平行線で進展はありませんでした。

この間、梓川花見地区に適当な場所があるということで、説明会を開きましたが、隣区の反対で断念し氷室地区に戻りました。

村でも対策会議を 村では五十六年四月二十日、三郷村ごみ対策研究会を発足させ、

ごみ設地の期限切れもあり、収集ごみの処理などの打開策の研究を行いました。その後、村内でも上長尾・東小倉・楡・北小倉などの予定地を探しましたが見つからず、六十三年一月、ごみ焼却場の問題は終息しました。



写真6-5 反対のデモをする住民
(昭和51年12月13日・信濃毎日新聞)

『三郷村誌』より

「七日市場の歴史(第四十一回)」

続 昭和期の七日市場①

曾根原 孝和

太平洋戦争から この頃「七日市場の歴史を学ぶ会」では、戦争から学ぶをテーマに、戦没者の事実を基に学習しました。七日市場の戦没者は、『三郷村誌』等からは現在十八名です。今回はその内の四名について学びました。一名の宮坂靖夫さんは、第二十四回(第二十九号)に記しましたので、他の三名を紹介します。はじめに丸山さんです。

比島での丸山さん 二十三歳の丸山峰男さんは、陸軍航空隊の気象部に属し、三重県から比島に移動しました。昭和十九年六月に伊勢を出発、門司、台湾を経て七月マニラ港に着きました。そして、十月十七日「白鹿丸」(八一五二総トン)に、丸山さんら気象部約一六五人を含む、約三千八百人が乗船してサイゴンに向かいました。

マニラが空襲必至の報により、九隻の船団を組み出航したのです。この時は、すでに制海・制空権ともに敵の手中にあり、船団は敵の魚雷の集中攻撃を受けました。「白鹿丸」は機関部に魚雷2発を受け、南方軍気象部は一三名即死。その後、乗組員はボート、いかだに乗り避難をしますが、豪雨のため波が高く、運航は難航し、日没後「白鹿丸」は沈没。この時の生存者は二三人で、気象部は三名と言われます。丸山さんはこの時に若くして戦没されました。家への便りから丸山さんは長男で、三人の弟がいました。三人宛てに「父さんに無理をさせないように働くことだね」と伝え、次弟の愛人さん宛てには「仕事と同時に勉強も頑張つて」と励ましています。父宛てには「夏蚕に秋蚕に忙しい事と存じます。本年の作物の状態は如何ですか」と、収穫を気遣う家族への思いが記されています。なお、三重を発つ時、遺髪・爪を送ったと思われる封筒があり、死を覚悟して出発したことが伺えます。



白鹿丸

「七日市場の歴史(第四十二回)」

続 昭和期の七日市場②

曾根原 孝和

「戦争から学ぶ」の二回目です。

航空科に入る萩原さん 萩原國治さんは、昭和十一年三月長野県蚕業試験場松本支場を卒業して、同支場で後輩を熱心に指導していました。そして、二十二歳の昭和十五年一月横須賀海兵団の航空科に志願して入りました。航空科に入って十カ月程の十一月二十日、兄龍弥さん宛てに次の葉書を出しています。(要旨)

- ・ 激励の手紙有難く拝見。
- ・ 軍人として立志したので、如何なる困難にも打勝つて、初志貫徹に邁進する覚悟。
- ・ 兄弟三人の分までの責任は大。兄上の御恩に報いる唯一のチャンス。
- ・ 身は如何に海底の藻屑と化しても大君の為ならば最大の名誉、喜び勇んで働ける。
- ・ 順調にいけば神様として九段の花とも咲くことが出来る。
- ・ あゝ我最大の幸福なり。(後略)

きちんとした字で書かれた葉書から、萩原さんが軍人として志し、覚悟をもって真剣に日々の訓練に取り組んでいることが伺えます。「海底の藻屑と化しても大君の為ならば最大の名誉、喜び勇んで働ける」ともあり、戦いに向かう若い純粋な気持ちに打たれます。

千島列島で戦死を 萩原さんは、十七年に千島列島に移動しました。この時、自分が操縦する飛行機で、生家や豊科(細萱)にある母親の実家等の上空を旋回しました。いよいよ戦地への気持ちで家族等に別れを告げたのです。そして、十九年八月二日二十六歳で戦死します。戦死の詳しい場所や様子は不明で、二十一年二月に届いた白木の箱には、英霊とだけが記されていました。

学習会で資料や写真を使って説明された甥の秀彌さんが、「きょうはいい供養の場にもなりました」と言われたことが心にしみました。



訓練の一場面

「七日市場の歴史(第四十三回)」

続 昭和期の七日市場③

曾根原 孝和

「戦争から学ぶ」三回目です。

中国で亡くなった布山さん 布山丑雄さんは、昭和二十年一月二十九日中国新城県小蘆督付近の戦場で戦死されました。行年三十三歳でした。

布山さんは、昭和十四年一月、松本連隊補充隊に入隊し、幹部候補生として同十五年六月に盛岡陸軍予備士官学校を卒業して見習士官を命ぜられました。そして、八月には征途に上り、北支の燕京周辺の防衛の任務に当たりました。

それ以来、第一線部隊の小隊長として各地を転戦されました。京漢作戦においては、旅団の幕僚として参加され、洛陽の攻撃には兵器弾薬の補給等の任務や指令部直属の警備に当たっていました。

その後は、河北省新城県付近の討伐に従事したのでした。

戦死の報告の時 戦死の報告には二十年二月、部下三人が自宅に見えられました。甥の幹夫さんは小学校三年生で、当時を思い出されながら語ってくださいました。

遺骨はなく、遺品として戦闘帽、サーベル、血染めの軍服などを渡されました。丑雄伯父は戦闘の先に立って進んだ時、戦死をしたと告げられました。戦闘帽や軍服には銃弾のあとがはっきり見え、戦争の怖さを感じたと語られました。

報告は祖父母や父が気丈に受けていましたが、今になって思い出すと無念な思いであったのではないかと、話されました。



布山丑雄さん墓

「七日市場の歴史(第四十四回)」

続 昭和期の七日市場④

曾根原 孝和

二つの火の見櫓撤去 今年七月六日、七日に藤ノ木と中木戸にあった火の見櫓が撤去されました。平成二十六年十一月九日、公民館横にあった火の見櫓の撤去に続くものです。

これは、市が二十七年五月七日から緊急・災害時等には、市民に情報を行政無線での確かつ迅速に知らせようとしたことからです。それで、公民館横には、火の見櫓と半鐘(以後鐘)に変わって無線放送の屋外スピーカーが設置されました。

今回撤去された藤ノ木と中木戸の二つの鐘は、公民館横の高さ五二センチのものよりやや小さく、大きさは直径三五センチ、高さ四五センチです。

櫓と鐘の歴史から 今回の機会に櫓や鐘の歴史を調べてみますと、大正十五年に鐘二個を購入し、藤ノ木と上真々部東村に付けたとあります。公民館横はそれ以前と推測されます。そして、大戦後の昭和二十五年には、音響のよい鐘に変更し、三十年には三か所の火の見櫓に外灯を設置してきました。さらに昭和四十五年に、公民館の火の見櫓を鉄骨に建て替え、昭和五十一年には南部(藤の木)と北部(中木戸)で鉄骨に建て替えをしました。

北部の櫓の位置 北部の火の見櫓は、昭和三十年頃までは上真々部東村(上からの松本道が中萱堰に接する手前南)と西木戸の観音原二か所にあつたようです。それが時期は不明ですが、中木戸一か所になりました。中木戸には一時期ポンプ小屋があつたといわれ、その撤去と火の見櫓の移動等が関係するかなどは、今後の課題です。

鐘や板木に感謝 大正・昭和・平成と続いた火の見櫓や鐘が役割を終りました。藤ノ木では鐘と板木を組合倉庫に、中木戸の鐘は、萩原秀彌さんの倉庫軒下に吊し保存いただいています。鐘は、自分たちで自分たちの地域を守ってきたことを語ってくれているようです。お出掛けの折はご覧ください。



「七日市場の歴史（第四十五回）」

平成期の七日市場①

曾根原 孝和

人口増加の七日市場 七日市場の五月一日現在の人口は、一、六六七人です。明治元年（一八六八）の人口は四七五人で、世帯数は一〇〇戸でしたので、驚きの数字です。昭和三十年以降では、全体的に増加を続け、最近はやや減少気味です。

急増の時期については、大きく二つの山があります。一番の山は、昭和五十五年（一九八〇）で五年前にくらべて二八割の増加率を示し、二番の山は、平成一二年で一七割の増加率を示しています。

松本に近く交通が便利 七日市場の高い人口増加率の理由には、いろいろな条件が重なり合っていると考えられます。主なことは、昭和四十一年（一九六六）の新産業都市事業の促進に関係して、広々とした土地や豊かな自然環境に恵まれ、松本市のベッドタウンとしての立地条件をもっていたことがあげられます。さらに四十五年から米の生産調整が始まったことや他の区より構造改善事業が遅れ、農地の住宅地への転用が図られたことがあるように思います。特に松本市に近く、大系線や国道などにも近く、交通の便がよいことが大きな要因と考えられます。

みどりヶ丘団地・アパート 堰下地区北西の住宅地（みどりヶ丘団地）は、一日市場の飛び地的な場所で、七日市場との境界に当たり、生活圈は七日市場でありました。そのため、四十九年から一日市場と会議を重ね、住民の「七日市場に」という要望を大事にしながら、五十三年に七日市場への帰属が円満に解決されました。このことが一番の山に関係しているとも思います。

また、昭和末年ころより個人住宅の建設のほかにアパート建設が見られるようになり、このことも人口増加に関係しているようです。

北部の櫓の位置 北部の火の見櫓は、昭和三十年頃までは上真々部東村（上からの松本道が中萱堰に接する手前南）と西木戸の観音原二か所にあったようです。それが時期は不明ですが、中木戸一か所になりました。中木戸には一時期ポンプ小屋があったといわれ、その撤去と火の見櫓の移動等が関係するかなどは、今後の課題です。

年	世帯数		人口		人口増加率 %
	戸	人	戸	人	
昭和30	120	608			
35	113	547			-10.0
40	145	603			10.2
45	160	647			7.3
50	176	687			6.2
55	254	947			37.8
60	287	1,050			10.9
平成2	326	1,171			11.5
7	387	1,317			12.5
12	478	1,542			17.1
17	554	1,663			7.8
22	617	1,748			5.1
27	650	1,747			-0.06
30	647	1,667			

人口増加率は5年前との比較